

ニッポン・ロングセラー考

「クラビノーバ」 SINCE 1983
ヤマハ株式会社

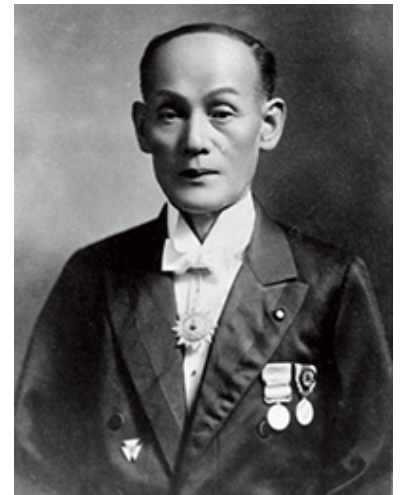
アコースティックピアノづくりの技と感性を
結実させた電子ピアノ

アコースティックピアノのトップメーカーであるヤマハが“新しい鍵盤楽器”を目指してつくり上げた電子ピアノ「クラビノーバ」。最新モデルでは、革新的な鍵盤の仕組みによってグランドピアノに迫る演奏感と弾き心地を実現することに成功した。1983（昭和58）年の発売から累計販売台数100万台を超える人気の背景には高い技術力はもちろん、「ピアノのヤマハ」だからこそその“感性”があった。

“新しい鍵盤楽器”を目指して誕生した「クラビノーバ」第1号

1980（昭和55）年前後の約30万台をピークに、現在は年間販売台数が2万台ほどとなっている日本のアコースティックピアノ市場。そんな中、住環境の変化やデジタル技術の進化によって売り上げを伸ばしているのが、電子ピアノだ。中でも、アコースティックピアノのトップメーカーであるヤマハが手がける電子ピアノ「クラビノーバ」は1983（昭和58）年の初号モデル「YP-30」発表から販売台数を増やし続け、ついに国内累計販売台数が100万台を突破。楽器を超えて工芸品に近いアコースティックピアノづくりで高い評価を得てきたヤマハが、精密機器業界からの参入もある電子ピアノ市場において、「最も本物のピアノに近い」との呼び声も高い「クラビノーバ」にどのようにして辿り着いたのか、話を聞いた。

ヤマハ株式会社の前身である日本楽器製造株式会社の創業は、東京に初めて電灯が灯った1887（明治20）年までさかのぼる。創業者の山葉寅楠氏が静岡県浜松市で1台の壊れたオルガンを修理したことをきっかけに、オルガンづくりを決意。1897（明治30）年には日本楽器製造株式会社を設立し、1900（明治33）年には国産初となるピアノの製造を開始する。そして、その2年後には国産初のグランドピアノが完成。1904（明治37）年にアメリカで開催された大博覧会では日本楽器製造によるピアノとオルガンが名誉大賞を受賞し、同社はピアノのトップメーカーへの道を歩み始めることとなる。



明治時代、創業者の山葉寅楠氏が静岡県浜松市にある浜松尋常小学校（現・元城小学校）の壊れたオルガンを修理したことからはじまったヤマハ。



ヤマハのロゴマーク。文字横のマークは調律に使う道具「音叉（おんさ）」。3本の音叉は「技術」「製造」「販売」の協力体制によるヤマハのたくましい生命力を表現している。

ニッポン・ロングセラー考 「クラビノーバ」



クラビノーバの第1号モデル「YP-30」。ブザー音のようだった従来の電子楽器に比べると、ピアノだけでなく、様々な楽器の音色で演奏することができる「YP-30」は画期的な進化だった。

電子ピアノ「クラビノーバ」の第1号モデル「YP-30」が発売されたのは1983(昭和58)年、日本楽器製造が創業100周年を機に、現在のヤマハ株式会社に社名を変更する4年前だ。当時、すでにアコースティックピアノにおいて世界シェア1位となっていた同社だが、「クラビノーバ」開発時のコンセプトはアコースティックピアノの代替品ではなく“新しい鍵盤楽器”をつくるということだった。「クラビノーバ」という名前は、ラテン語で「鍵盤楽器」を意味する「Clavier(クラビア)」と「新しい」を意味する「nova(ノーバ)」を組み合わせた造語だ。弾き方こそ鍵盤楽器だが、ピアノだけでなく、ハープシコード(チェンバロ)をはじめ様々な楽器の音色で演奏することができ、ピアノを超えた新しい楽しみ方を提供する楽器。1970年以降、同社がエレクトーンをはじめとする電子楽器の開発で培ってきたノウハウと技術力をもって完成させた「クラビノーバ」の第1号モデル「YP-30」は、まさに“新しい鍵盤楽器”の名に相応しい画期的な楽器だった。ちなみに、同じく電子楽器の「シンセサイザー(DX7)」も同年に発売され、当時のバンドブームの波に乗り、こちらも同社の大きなヒット商品となった。

ピアノトップメーカーのあくなき挑戦

第1号モデル「YP-30」が発売された1983(昭和58)年以降、3~4年ごとにモデルチェンジを重ねてきた「クラビノーバ」。現在は、ピアノ本来の表現力を追求する「CLP」と、デジタル機能で多彩な楽しみ方ができる「CVP」の2つのシリーズを展開している。シリーズそれぞれに、ピアノのトップメーカーならではの強みが反映された「クラビノーバ」だが、現在に至るまでにターニングポイントとなった技術革新がいくつかある。まずは、1986(昭和61)年の「CLP-50」におけるサンプリング音源の採用だ。それまではFM音源だったものを、実際のヤマハのコンサートグランドピアノにマイクを立てて演奏音を録音して搭載したのだ。それによって、もちろん音程は同じだが、音色に表情が出せるようになり、「クラビノーバ」の最大の魅力である“音の表現力”の幅を広げることに成功した。この手法は改良を加えながら、現在も引き継がれている。



「グレードハンマー鍵盤」という革新的な鍵盤アクションの仕組みによって、「電子ピアノであることを忘れるほどの演奏感」に大きく近づいた。

2つめは、1996(平成8)年の「CLP-911」における「グレードハンマー鍵盤」の採用だ。グランドピアノ同様、鍵盤アクションに従来のバネではなくハンマーを使うことで、その重みによって弾いた時の手ごたえや指を離れた時の自然な鍵盤の戻りを再現できるようになった。低音域では重く、高音域では軽くなる本来のピアノを持つ鍵盤タッチも忠実に再現し、ピアニストに「電子ピアノであることを忘れるほどの演奏感」と言わしめる現在の「クラビノーバ」の弾き心地に大きな一歩を踏み出した。

ニッポン・ロングセラー考 「クラビノーバ」

一方、「CVP」シリーズは世の中の技術の変化に対応し、近年では2013(平成25)年にタッチパネルを搭載している。「CVP」シリーズの大きな魅力は、ジャズ、ロックをはじめ様々な伴奏スタイルを選べるスタイル(自動伴奏)機能やカラオケ機能、録音機能、さらにアプリとの連携など、多彩な機能。それらの豊富な機能を使いこなすために、写真やイラストをふんだんに使ったタッチパネルでより直感的に操作できるように工夫された。

「CLP」シリーズはグランドピアノの表現力により近づけるために、「CVP」シリーズはより多彩な楽しみ方ができるように、「クラビノーバ」は進化を続けてきた。もちろん、進化したのは技術面だけではない。時代の流れやトレンドに合わせて、カラーバリエーションやデザインも変えてきた。なかでも、3年前に初めて登場した「CLP」シリーズのホワイト系カラー「ホワイトアッシュ調仕上げ」は、ミラノサローネなどからインテリアのリアルなトレンドをキャッチし、反映させたもの。色をつくり上げるのにかなりの試行錯誤をくり返したが、発売と同時にこの「ホワイトアッシュ調仕上げ」は爆発的な売れ行きをみせ、以降、定番色となった。そして、この5月、「CLP」シリーズはさらなる進化を遂げ、最新モデル「CLP-600」シリーズが登場する。

「ピアノのヤマハ」の感性にデジタルの技術を融合させる

今年5月から順次店頭に並ぶ「クラビノーバ」の最新モデル「CLP-600」シリーズの最大の特徴は、約20年ぶりに刷新された新しい仕組みの鍵盤、その名も「グランドタッチ鍵盤」だ。鍵盤に触れた時の感覚をよりグランドピアノに近づけたいという思いで、鍵盤アクション機構そのものを変えたのだ。それによって、ピアノッシモからフォルティッシモまで音色の幅を広げることに成功しただけでなく、鍵盤を強く押した時と弱く押した時の間のグラデーションがスムーズ、かつ、なめらかに。さらに、鍵盤の先端から支点までの距離をグランドピアノと同等の長さにしたことで鍵盤奥の部分のタッチ感が向上し、グランドピアノに限りなく近いリアルな弾き心地を手に入れた。音についても、「クラビノーバ」が搭載する2つの音、ヤマハ最高峰のコンサートグランドピアノ「CFX」とウィーンのパianoブランド、ベーゼンドルファー社の「インペリアル」のサンプリングが最適化され、より自然で豊かな響きが実現した。



タッチパネルによって、「CVP」シリーズの多彩な機能にすばやくアクセスできるようになった。



真っ白ともアイボリーとも少し違うニュアンスカラーが今の時代にフィットし、爆発的に売れた新色「ホワイトアッシュ調仕上げ」。



最新モデルの「CLP-600」シリーズはモダンなインテリアにマッチする新しいカラー「ダークウォルナット」を含む、5色展開。ヘッドフォン装着時に立体的で自然な響きが再現される「バイノーラルサンプリング」を採用、「CLP」シリーズ初となるBluetoothも内蔵されている。

ニッポン・ロングセラー考 「クラビノーバ」

音響の面では、弦やボディの共鳴音までもモデリングした独自のシステム「バーチャル・レゾナンス・モデリング」を改良。低音・中音・高音域を専用のスピーカーとアンプで響かせる「3way スピーカーシステム」を搭載し、豊かな共鳴音とともに「CFX」と「インペリアル」の音色を表現できるようになった。

今回のモデルチェンジの要となった「グランドタッチ鍵盤」で、同社の開発者が目指したのは「鍵盤を押した時の重さの変化を、いかにグランドピアノに近づけるか」。グランドピアノの鍵盤は、まず触れた時にすっと軽く沈んで、その後グッと重くなって、最後に再び軽くなる。約1センチの鍵盤に集約されたその複雑な動きをつくり込んだ。そのためにまずしたのは、ホールに「CFX」とベーゼンドルファーの「インペリアル」を1台ずつ置き、ピアニストが演奏、開発者全員でその音色に耳を傾けることだった。それぞれの音色を分析し、試作品をつくり、弾いて、評価して、また試作品をつくり…を幾度となくくり返し、ブラッシュアップしていった。開発担当者曰く、「すべてが苦勞の連続でした」とのことだが、その製造過程は電子ピアノといえど、もはやアコースティックピアノの領域だ。

「クラビノーバ」は電子ピアノでありながら、軸となっているのはヤマハが120年を超えるアコースティックピアノづくりで培ってきた高い技術力に裏打ちされた“感性”だ。ピアノのトップメーカーしか持ち得ないその感性に、最新のデジタル技術を融合させ、進化を続けてきた。今後の課題は、「クラビノーバ」のみならず、鍵盤楽器全般において今までまったく鍵盤を触ったことがない初心者、特に大人の層に、その楽しみ方をどう伝えるかだ。まだ開発段階ではあるが、初心者の演奏をサポートする機能の充実や、グループ会社であるヤマハ音楽教室と連携して、より多くの「クラビノーバ」デビューを目指す。



「CVP」シリーズはタッチパネル化で操作性がよくなり、最近では大人趣味層に受けている。

取材協力：ヤマハ株式会社

<http://jp.yamaha.com/>



NTTコムウェア株式会社

URL : <http://www.nttcom.co.jp/>

WEB掲載：2017.4